

母の630 ひろば

doshinsha / haha no hiroba



子ども発見!⑬ 松成真理子 2
ひろがる!ひろがる!紙しばい⑫ 下嶋哲也 3
いきいきとした「知力」を育てる 白濱洋征 4-5
「怪談オウマガドキ学園」の舞台裏 高津美保子 6
新刊紹介 種村由美子、鈴木潤 7

イラスト/みやこしあきこ

父よ、子よ

渡辺一枝

ある土曜日のことだった。「間もなくドアが開まります」のアナウンスを耳にして乗った車内で、幼い子どもを抱いたお父さんの姿が目に入った。お母さんらしい人の姿はなく、どうやら父子でのお出かけらしい。お父さんの足元の大きなトートバッグには、かわいい絵柄のタオルが中の荷物の上にふわりとかがっていた。抱かれた坊やがお父さんの頬に手を伸ばすと、お父さんは小さなその手をつかんでパクパク食べる真似をし、子どもは嬉しそうに声を立てて笑った。

そんな2人を見ながら、ふと向こうに目をやると、そこにもまた父子の姿があった。ベビーカーには幼い女の子が座り、リュックを背負ったお父さんは、少女となにやらおしゃべりをしていた。少女は中吊り広告を指さし、描かれた絵のことを話しているようだった。声は聞こえなかったが、2人の笑顔が見えた。彼らもやはり父子だけの外出らしかった。

幼い人の姿を見ると嬉しい心地になるが、同時に2組もの父子の姿に出会えて、嬉しさ倍増。幸せな思いでいっぱいになって電車を降りた。ところがまた、なんと偶然のことだろう。隣の車両から降りてきたのは、手をつないだ父子だった。お父さんはもう片方の手に、大きなバッグを提げていた。育児に関わるお父さんが増えていると感じてはいたけれど、子育て中の世代には、今やそれは当たり前のことなのだろう。それもまた私には嬉しいことだった。

それからひと月ほど経った日に、原発事故被災者の男性から話を聞いた。

政府や東電の情報隠しと御用学者の安全神話で、どれほど被ばく者やその被害が増えているか、また避難生活により家族や地域の繋がりが分断され、地域の自然、歴史や伝統、文化など全てが奪われてしまった現実を話してくれた。

彼は言った。「原発事故が残したのは、悲しみと、人殺しの武器になるプルトニウムだけです」事故後の暮らしで何か良かったと思えたことや、心から笑ったことはあるかと問うと、「以前は仕事が忙しく出張も多かったし、子どもとゆっくり遊ぶこともなかった。でも今はキャッチボールをしたり、保養でキャンプに連れて行ったり、子どもと過ごす時間ができてそれが良いことかなあ。心から笑ったこと……、酒を飲めば楽しくなって笑っていますよ」

あらためて原発の不条理を思い、また、あの日出会った3組の父子を思い出し、子どもらの未来を決して戦火にまみれさせてはならないと、戦死した父の顔を知らない私は、強く思った。

(わたなべ いちえ/作家)

空を 飛んでいた 少女

人見知りもなく、友だちがいなくても平気で、近所をのびのび自由に駆けまわっていた小学生のはじめ頃。学校から帰って、ランドセルを部屋のすみにぼんと放って公園に行くと、白いブラウスをひらひら風にたなびかせて、颯爽とブランコを立ち漕ぎしている女の子がいた。

高く高く空に弧をえがいて、もう少しでぐるりと一回転して飛んでいきそうな勢い。あまりの勇ましさに、うっとりと思われた。

ブランコから降りる時に、ブラウスからのぞいてくる指先がぴんと真っすぐで動かないことに気がついて、どきとした。初めて見た義手だった。

その子が帰ったあと、同じブランコに腰かけてみた。あの子のように片手でくさりを持って、勇気りんりんやる気まんまん地面を蹴ったら……。次の瞬間、青空が見えた。あお向けに最短距離で地面に落っこちた私、かっこ悪！



まつなりまこ
松成真理子

絵本作家

「片手でブランコ漕ぐってすごいんだ」と学習した日。それからその子と会うことはなかったけれど、数年後、中学校の入学式で見つけた。

まっすぐな眼差しとまっすぐな左手は変わらないうま、いつそつりりしく成長した彼女は、文武両道のひと。学級委員に選ばれたり、運動会で走ったり、ソフトボールは右手で球を受けたグローブをストンと地面に置いて、右手で投げ返し、瞬間にまた右手にグローブをはめて、とっくに守備に付いている。何でも上等にこなしてしまう。かっこいい。

クラスも別で言葉を交わすこともなく、こっそり見つけた卒業までの三年間。彼女はどこかですごく素敵な大人になっているだろう。

遠いあの日に白いブラウスをひらひらさせて空を飛んでいた、忘れられない少女。その子をドキドキしながら見ていた、子どもの私の思い出の時間が今もある。

下嶋哲也

しもじま てつや／言語聴覚士を志す学生の指導育成を行う傍ら、言語聴覚士として病院で臨床業務に携わる。紙芝居実演を子どもの臨床や入学試験に取り入れるなど、紙芝居とリハビリテーション教育・臨床の接点を模索中。

ひろがる！
ひろがる！
紙しばい

12

私は埼玉県所沢市の言語聴覚士養成校「ことばのリハビリ職の学校」といえば分かりやすいでしょうか。で卒業の人たちの教育をしつつ、週の半分ほどは隣の病院でことばの遅れのあるお子さんの支援や発音の練習などの臨床をしています。そんな私と、紙芝居の出会いには図書館でした。わが子に演じたことをきっかけに面白さに目覚め、多くの紙芝居を演じるうちに、作品の質や目的もさまざまであることがわかってきました。

演じはじめて一年くらい経ったある日。仕事の中で「ことばのリハビリの仕事をする人により実技演習の課題はないか？」を考え探していたこと、紙芝居が「パチッ」とつながり、紙芝居をカリキュラムに入れることを思いつきました。なぜかという、紙芝居が「伝える場」をつくること。脚本に日本語の美しさや強さがあること。それを自分の肉声と表現力で伝える難しさと愉しさ。思い切った演じることで、聴き手と場を共有できるライブ感。人と人が心を一緒に動かす瞬間があること……。どれもが、言語聴覚士という「ことばとコミュニケーションの専門家」として大切なものばかりじゃないか！ と思ったからです。さっそく調べて童心社さんに講師の派遣をお願いし、トントンとすすみました。同僚たちも最初は半信半疑でしたが、実

ことばの リハビリと 紙芝居



皆で演じあうことで、よい学びになります。

際に演じる場面や講義を聞くうちに、きわめて臨床と共通点が多いことを知り、みな「紙芝居はすごい」と納得。思いっただけで終わらなくて良かった……。

紙芝居は、まず「観客はきっと私の演じる作品を楽しんでくれる」という観客を信じるころ、「きっと人前でも私らしく演じられる」という自分を信じるころ、そして「すぐれた作品はそれ自体が伝える力をもっている」という作品を信じるころ……三つの「信じるころ」があるかどうかを、自分に問いかけてくるメディアではないでしょうか。

紙芝居の演じられる場には、「信じるころ」という「目には見えないもの」が中心にあるように思います。信じるころがあればあるほど、場にエネルギーが満ちていき、それが共感と「コミュニケーション」を生み出しているのだと私は思っています。

学生（ちなみに若い女性が多い）も、実際に演じてみて伝えることの難しさと楽しさを体験し、奥深さに少しずつ触れているように思います。クラスで誰が何を演じたかを、数年後になってもお互いに覚えていることも多いです。「思いつ」にまでなるなんて、やっぱり紙芝居はすごい！

今の時代に、信じるころを！
今の時代に、もっと紙芝居を！

●「SIあそび」とは

何かに熱中している時の子どもは、いきいきと光り輝いています。意欲と集中力に満ちた幼児の躍動する姿に魅せられて、私は「SIあそび」の教育実践に四年近く関わってきました。

「SIあそび」とは、創造性教育の先駆者J・P・ギルフォード博士（一九二七～一九八七・南カリフォルニア大学）の知能構造理論（Structure of Intellect: SI理論）に立脚した幼児教育プログラムです。知能の発達が著しい幼児期に「自分の頭で考える」ことを習慣化し、いろいろな頭の使い方を幅広く体験することによって、柔軟な発想や応用力を育てることを目指します。

たとえば年長児（五～六歳）のあそびに「ことばのリングつなぎ」という課題があります。時計、ハンガー、郵便受けなど、身の回りや家庭の中でよく見かけるものが描かれた二四枚のカードの中から、同じ仲間だと思うカードを三枚ずつリングでつなげて完成させます。新聞と本とテレビの絵カードを集めて「見るものの仲間」としたり、「こみ箱と冷蔵庫とタンスの絵カードを「モノを入れる仲間」としたり、子どもたちはおのおの

いきいきとした「知力」を育てる



白濱洋征

しらはま ひろゆき

NPO法人ギルフォードSI教育協会代表理事。
「SIあそび」の指導講師として全国の保育園、幼稚園に赴く。
主な著書に『子どもに自信をもたせる育て方』（サンマーク出版）
『うれしい言葉は人を変える』（蒼海出版）他。

考え方で進めていきます。ある子は、電気掃除機と電卓とテーブルで仲間をつくり、「掃除機はモーターで動く。電卓は手で押すと動く。テーブルは地震が来ると動く。だから動く仲間だよ」と答えました。またある子は、リュックサックとラジカセと電話を仲間にして、その理由を「かける仲間」としました。こうしたやわらかな発想は、私たち大人にはとても及びのつかないものです。

また年中児（四～五歳）のあそびに、同じ大きさの三角形のカードを何枚か使って、意味のある形を作る「かたちのおもいつき」という課題があります。「四枚使って思いついた形を作ってみよう」という課題に対して、ネコの目とか橋とかメガネとか、いろいろな考えが子どもたちからどんどん出てきます。三角形を四枚しか使えないという条件（制約）があるのが当然考えを出すときに難儀しますが、だからこそ考えが深まるのです。いずれも、あそびに熱中し、没頭し、じっくり考えることで集中力や忍耐力が身につけていきます。

「SIあそび」をおこなうときに、私は次のことを心がけています。

- 教えるのでなく、やりつとせる気持ち

や好奇心を引きだす。

結果(できる、できない)を一切問わない。過程(取り組む姿勢)を重視する。

- 子ども同士を比べない。競争させない。
- おのおののペースで進んでいくようにする。(一人ひとりの違いを受け入れる)
- 関心をもって見守る。極力口や手を出さない。子どもに任せる。

とはいえ、これは「Sーあそび」に限らず、子どもの遊びに大人がかかわる時に常に大切な態度ではないでしょうか。

●子育てで大切にしたいこと

私は毎日のように日本全国の幼稚園、保育園におもむき、保育指導や講演、子育て相談などで一日を過ごしています。そんな私が、子育てで大切にしておきたいと思うことをいくつか述べてみます。

子どものもつ自発性を生かす

あらゆる活動は、その子がその気になって初めて成り立ちます。子どもが自分からやろうとするときは全て思考活動です。ボタンをはめる、靴を履く、衣服の

着脱……。何度も失敗しやり直し、時間をかけることが、自分で問題を解決する力や「必ず何とかなる」という心構えを作っていきます。

三歳児が一番よく使う言葉は「自分でする」「いやだ」です。そして頑固。それを「わがままな子だ」と親は叱りますが、とんでもない、意欲と集中力に満ちた子どもです。

「できるまで待つ」「遠くから見守る」そして「微笑んであげる」それが三歳までに親がしてあげられることです。どうしても急がなければならぬ親の事情がある時は「早へしなさい」の代わりに、「急いでほしい」と協力をお願いすることが大切です。

注意の集中度

好きな遊びに熱中すると、知らず知らずのうちに集中力や忍耐力が身につきます。「おもしろい」「たのしい」「うれしい」が子どもの意欲の根源です。子どもの興味によりよって、熱中体験をたっぷりさせてください。ちょっとしたことでも我慢できない子が、ディスプレイで三時間、四時間の行列をなぜ待てるのでしょうか。自分の心の中に「快(かひ)」「喜び」がイメージされたときに、苦しいこ

とも我慢できるのです。

「うちの子は飽きっぽい」とか「落ち着きがない」と母親は嘆きますが、そもそも、まったく集中力のない子はいません。落ち着きのない子は、叱れば叱るほどますます落ち着きがなくなります。

また、子どもの話をしっかり聴いてあげることも、人の話を聴く力や話す力になります。

壁を乗り越える力

何か難しいような課題に取り組んでいる時に、すべあきらめる子どもと、もう一度やってみようと挑戦する子の違いは何でしょうか。「Sーあそび」の保育でいつも感じるのは、あきらめる子は課題を「おもしろそう」「ではな〜」で

か、できないか「でこらえる傾向があります。本当は「やりたい」けれど、できなかったら叱られるから「やりたくない」と言うのです。失敗を叱る、きょうだいや友だち同士を比較する、完全さを要求する、結果だけに注目してはめる。そうした結果主義的な親の態度が、消極的で、受け身で、自信のない子(自己肯定感の低い子)を育てていきます。大切なのは、欠点を直そうとするのではなく、長所をのほしてあげることです。

やる気の根源は情緒の安定

幼児期は、「からだ」と「あたま」と「こころ」が一体になって働いています。「よく眠り、よく食べ、よく遊ぶ」幼児期の生活が毎日規則正しくくりかえされるのが、子どもの情緒の安定につながります。情緒が安定してくると、意欲も出てきます。

子どもは、不安になったり緊張したりすることが続いてストレスがたまると、親に甘えることでそれを切りぬけようとします。甘えることは、子どもが自分の心のバランスをとるために不可欠な行為なのです。抱っこ、おんぶ、添い寝、一緒に風呂に入る、毎日絵本を読んであげる、叱ることをやめて、協力をお願いする……。そういう受けとめ方をしながら、子どもは心に勇気がわいてきます。「あるがままの君でいい」というメッセージを送りたいものです。甘えさせるということは、甘やかすことではありません。甘やかすことは過干渉、過許可につながる、大人の都合を押しつけることになるのです。

「理想の子どもなんていない。だから子育てはおもしろいし、楽しい」と思うのが、私の実感です。

BOOK

「たね」から始まる
野菜のいのち



「どでん かぼちゃ」
いわさゆうこ/さく
本体価格1100円+税

種村 由美子

なす好きの私が、いわさゆうこさんの『つやっつや なす』と出会った時の驚きは今でも忘れません。本物のなすに負けないほどのつやがあり、みずみずしくて、土の香りまで感じたのです。それ以来、「どーんと やさい」シリーズの大ファンになった私は、当店にて3回も原画展をさせていただきました。丹念に描かれた原画を見れば見るほど、いわささんの野菜に対する深い想いが伝わってきました。

そして、この秋、シリーズ第6弾の『どでん かぼちゃ』が登場しました。今回も楽しくリズムカルな言葉と写実的だけどあたたかい絵で、私たちにかぼちゃの魅力をたっぷり伝えてくれます。光合成のことや受粉のこと、かぼちゃの種類やたねのことをやさしい言葉で教えてくれます。毎回、裏表紙に描かれた実物大の「たね」もこのシリーズの楽しみの1つです。この「たね」からふた葉がでて、つるが伸び……やがて立派なかぼちゃとなり、命をつないできたのです。そんな「たね」の偉大さにも、いわささんの絵本は気付かせてくれます。私たちの身近なところにある野菜がこんなに生き生きと輝いていて、新しい発見があることを教えてくれる「どーんと やさい」シリーズ、いわさゆうこさんの想いととも手渡していきたいと願い、店頭では子どもばかりでなく大人の方にもおすすめしています。

(たねむら ゆみこ/児童書専門店ティール・グリーンinシード・ヴィレッジ店主)

上の子が小学生になりました。保育園の頃はどこに行くにも親と一緒に当たり前。1人きりでどこかに出かけることなんてありませんでした。

「ひとりでおでかけの試練」はある日突然やってきました。朝、家の前で見送ると学校までは1人で歩いていくし、学校からも当然1人で帰ってきます。時どき友人から「橋の欄干にのぼって下のぞいてたで！」とか「帰りにランドセル置いたまま公園で遊んでたの見たよ！」などと報告を受けると気が気ではありません。

ペンギンの子もがどうやらおばさんの家に1人で出かけるようです。ところがとても寒い日らしく道が凍っています。見ている方はハラハラドキドキするのですが、ペンギンの子はいたって冷静。しんちょうに滑ったり、おちついて階段をのぼったり、足がすくむような溝をかつこよくとびこえたりします。そうなのです、私はこんな風に子どもを見ていたい。「ちゃんと前見なさい！」とか「ほら、あぶないじゃない」とか余計なことを言わずに見守っていたい。ちょっとくらい転んでもすべても周りに誰もいなければ、自分で起き上がるし、また歩き出すのです。子どもを膝に乗せて読みながら「ちょっと離れてが丁度いいんじゃない？」と五味さんに言われているように思えたのでした。

(すずき じゅん/メリーゴーランド京都店長)



「ゆっくりおでかけ」
五味太郎/さく
本体価格1000円+税

ゆっくりと見ていたい

鈴木 潤

BOOK

11月の新刊図書!

とことこえほん

まんまん ぱっ!

長野麻子/さく
長野ヒデ子/え

本体価格880円+税



「まんまん ぱっ!」「ばいばい ぐる〜ん」
楽しい音と、色彩ゆたかな線や形が魅力的な、
親子でいっしょに楽しめる赤ちゃんの絵本。

かんぱい!シリーズ

なきむしに かんぱい!

宮川ひろ/作
小泉み子/絵

本体価格1100円+税



三年生になって初めての遠足に熱で行けなくな
った咲。眠っているあいだに、沢山泣いて
大きくなった咲の成長記録がひもとかれて…。

単行本図書

ファンタジーとアニメーション —古田足日「子どもと文化」の 継承と発展

増山均、汐見稔幸、加藤理/編

本体価格2950円+税



古田足日の論文「子どもと文化」に代表される子
ども文化論・育ちについての論考を、その可能性
と課題の両面から新たに捉え直す試み。

読者の声

単行本図書 リラリシリーズ
生きる 劉連仁の物語

森越智子/作 谷口広樹/絵
本体価格1600円+税



中三の息子の読書感想文のため本人の希望で購
入しました。私も読んでとても感動しました。日
本がおこなったことの残酷さに腹が立ち、申し訳
なく思うと同時に、このような物語を今の不安な
政治状況の中、世に投げかけてくれた作者や出版
社に心からの感謝を伝えたいです。
(愛知県 M・K 四三歳)

どーんと やさしい
まっかつか トマト

いわさゆづこ/さく
本体価格1100円+税



わたしの保育園では近年、食育活動を活発にお
こなっています。菜園をつくって野菜に触れたり、
料理をしたり、それでももちろん食べることも…。
この絵本は実物に忠実に、優しいタッチで描かれ
ていて、知識も得られるのでいいですね!
(鳥取県 R・W 五四歳)

絵本・こどものひろば
かあさんのまほうのかばん

よしみちけい/文 なかざわくみこ/絵
本体価格1400円+税



まごちゃん専用のかあさんのかばんだけでなく、
あめたまが出てくるおばあちゃんのかばんの中身
も素敵でした! げんちゃんのかばんも加わって
思い出がいっぱいあったかばんたち……。なん
だか、大切なものを思い出しました。

(広島県 Y・H 六一歳)

2016年11月15日発行(毎月刊)

母のひろば 第630号
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会

〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6

株式会社童心社内

電話03(5976)4402

編集発行人: 大熊悟

童心社のホームページ:

<http://www.doshinsha.co.jp/>

フォーマットデザイン: bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌(無料)と振込用
紙をお送りいたします。

見本誌と同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただきます
と、手続き完了
となります。

購読料金は1年分600円(送料とも)。



あとがき

●うちの父は子どもに対して不器用
な人で、自転車のサドル前のフレー
ムに幼い僕を座らせ走り回るのが唯
一の遊び方でした。少し僕が大き
くなると科学博物館通いがそれに代
わりました。僕はまだしも姉には苦痛
だったようです。後で「どこが面白
かった?」と訊かれるので。しかしそれ
も今ではよい思い出で、親と過ごす
時間が子どもには大切ですね。◎

●発足以来童心社と深い関わりのある
紙芝居文化の会。創立15周年を
迎え、世界44か国からの会員数は
800名を超えるまでになりました。
今年の総会後に登壇されたのは田畑
精一先生。戦争体験から人形劇に身
を投じ、絵本・紙芝居作家となるま
で…。その半生から、優れた作品を
生み出すのは作家の生き方そのもの
だと改めて実感したのでした。◎